

# 人文学系ライブラリアンのキャリアパス

## 人文学の危機の時代に働く

横田 カーター 啓子\*

ITの発達によりあらゆる人が情報を発信することが容易になった。事実、フェイク、実物と識別が困難なディープフェイクが混在し、事実誤認も「違う形の事実 alternative fact」とされ、また公文書の改竄が公然と行われる。自分の好みの情報のみを取り入れる傾向が強まっている社会において、事実の記録・保存・提供という情報に携わる人々の仕事の重要性和社会責任はこれまでに増しており、人文学司書の存在意義と役割は極めて重要になっている。

キーワード：人文学デジタル人文学、デジタルキュレーション、コレクションとしてのデータ、リサーチデータライフサイクル、データライブラリアン

### 1. はじめに

「インフォプロ」は米国の大学図書館ではあまり使われない言葉なので戸惑いがあるが、情報に携わるプロ、図書館では司書と考えて、「インフォプロ」にとってキャリア形成とは何だろうか。世界の現状を見ると、ITの発達によりあらゆる人が情報を発信することが容易になった。そのことは、事実、フェイク、実物と識別が困難なディープフェイクの三種のデータが混在し、事実誤認も「違う形の事実 alternative fact」とされる状況も創り出している。また公文書の改ざんが公然と行われたり、自分の好みの情報のみを取り入れる傾向が強まっている社会において、事実の記録・保存・提供という情報に携わる人々の仕事の重要性和社会責任はこれまでに増している。ここで自分は何のために情報の仕事に携わるのか、なぜそれは大切なのか、その理由をしっかりと考え、自分の立ち位置に確固として踏ん張ることが大切であることを、最近、日々強く感じる。そうしないと流される。それも自分も社会も人類の存続にとって危険な方向へ。そんな危機的สังคมで「インフォプロ」たちは仕事をしている。

根本を確認したい。米国の図書館業務に携わる者にとってその使命の根幹は「民主主義の建国理念」、米国憲法にある「思想の自由」である。筆者は「インフォプロ」の基本を「民主主義社会の持続的発展の根幹である思想の自由を保障するため、情報と人を結び付け、人間社会をより豊かにする使命を負う仕事」とまず理解したい。

司書は、利用者と資料提供者の間にあつて利用者の要望を代弁し、資料がより有用に用いられるためにアクセスを改善することが大切な仕事である。「米国の日本研究司書達」はなぜそんなに質問するのですか、なぜそんなに強く意見

するのですか」。筆者が初めて日本出張した時にデータベース会社でされた最初の質問である。司書の要求は「疎ましくすらあった。しかし、それらが3年後には日本の図書館の状況になっていたことに気付いて、真剣に耳を傾けるようになった」と2年ほど前にもある会社の方に言われた。今では、「米国では市場調査しなくても司書がいて楽」と無料コンサルタントの様に思われている。社会変化のスピードは速く、最近では日米間に3年もの時差はなく、ほぼ同時進行的にデータを巡って多くのことが動いている。例えば、内閣府が今年発表した研究データポリシー策定のためのガイドライン<sup>1)</sup>では、研究公開リポジトリ基盤整備には国際認証基準 (Core Trust Seal) を参考にすると言及しているが、現在、認証されているのは欧州の機関が多く、日本では二か所、米国でも少数でまだこれからである<sup>2)</sup>。

すでにこれまでも指摘されているように、北米 (米国・カナダ) の大学図書館の司書はアカデミックな専門職 (faculty) で、図書館情報学修士号と専門分野での修士号・博士号が雇用条件になっている。固定した職種で事務職で雇用された者が内部で昇進していくことはない。例えば、日本研究司書は職種名で他に内部人事の rank (任務・給与体系) があり、勤務年数と業績による厳しい業務査定を経て、assistant, senior assistant, associate, senior associate, Librarian と教授職と同様に昇進する。また、目録作成以外の業務は外部委託されることのない米国図書館での筆者の経験と考察が、人事異動と業務委託の多い日本の雇用システムの中でのキャリア形成を考える上でどのくらい参考になるのかわからない。

しかし、こういった雇用や業務形態の違いがあっても大きな枠組みを考えると、現在、私達は国を問わず、気候変動の目に見える影響を受け、増加する多種多様な電子情報の海の中で生活し AI 革命を身近に控えて、言葉の力が弱まっていることに不安感を持ち、「意識的な情報の扱い」が安全な暮らしのためにも重要ではないかと感じているのではないだろうか。気候変動研究と対策に国際プロジェクトが必要なように、知的情報基盤でも国際的な相互運用を可

\*よこた かーたー けいこ ミシガン大学 ハーラン・ハッ  
チャー大学院図書館 日本研究司書 (Librarian)  
<https://www.lib.umich.edu/users/kyokotac>  
orcid.org/0000-0002-5267-0319 (原稿受領 2018.10.23)

能にする基準整備が必要で、TEI や IIF の国際プロジェクトに日本の関係者も中心メンバーとして参加している<sup>3)</sup>。前述した国際認証基準の査定委員会にも日本の研究者が参加している。そんな同時代に生きる日本の同僚、仲間たちにこの拙稿が参考になれば幸いである。

## 2. 図書館生き残り作戦—変化するサービスと司書

### 2.1 図書館をめぐる社会環境

ここで簡単に過去を振り返っておこう。筆者が大学図書館司書として雇用された 1999 年は、IT 革命が起きて十数年、電子データベースは既に増加して、図書館の利用者が減り図書館には危機が迫っていた。「いつでも、どこでも利用できる図書館」として遠隔地利用を可能にしサービスを良くすれば良くするほど図書館の来館者は減り、大学経営陣は図書館の有用性を益々疑問視するようになり予算を削減、図書館は自分で自分の首を絞めるという皮肉な矛盾に陥った。「グーグルがあれば図書館無用」の声は大きくなり、退職者のポジションは後任者の補充はなく消滅。図書館は「生き残り作戦」に真剣に取り組み始める。

まず、館内資料と設備の利用動態調査を人類学者と統計学者の協力を得て徹底して行い、新たなサービスと図書館の価値を創造していく。それは、後に日本でも導入された学習の場としての図書館、リテラシー教育者としての司書がいるラーニングコモンズである。米国の大学は学生に真剣な学習を要求する。中退者の最大の理由は授業についていけないことである。また、校内での暴力（学生の不満・困難）の解決策等を、図書館と学生生活課が協力調査し、教育学研究の知見に基づいて学生の認知学習が高まる方法を探り、安全で豊かな大学教育を保証する場として、ラーニングコモンズが司書と建築家との共同作業で設置されていった。図書館は単なる「本の箱」ではなく、学生が課題解決に必要な資料を提供し、調査スキルを伸ばし、思考能力を高める大学の中心的な「教育の場、知的創造の場」としての有用性を確保していく<sup>4)</sup>。

日本の経済界も政府も、そして教育界も、ビッグデータと AI 時代を迎えて、日本が国際競争力を持ち得る人材に欠くことを認識し、大学教育から小学校教育にいたるまで、「自ら思考する能力、革新を生み出す能力」の育成を訴え、アクティブラーニングに言及することもある。だが、そのどの議論にも自主学習を可能にする図書館整備についての言葉はない。自主学習に利用できる有用な資料は身近にあるのだろうか、資料収集スキルと資料の信頼性・有用性の判断はどこで学ぶのだろうか、学習基盤の図書館と司書のないアクティブラーニングは絵空事だ。ラーニングコモンズも「本のある学館」になつてはならない。建物にラーニングコモンズの命を吹き込むのは司書の仕事である。図書館・アーカイブと「インフォプロ」の重要性が大学経営陣と研究者に理解される必要がある。図書館が学術基盤として認識されている米国ですら、道路や水道・電気等の社会基盤とそれを維持・発展させる仕事に従事する人々のことは意識され感謝されることが少ないように、図書館は空気

の様に忘れられることが多い。研究者や大学経営陣に図書館・司書の重要性を説明し認識させ、司書の労働環境を整えて、より豊かな利用者サービスができるように予算獲得するのはインフォプロ管理職の最重要任務だろう。

### 2.2 変化する司書の役割と資格

さて、2008 年のリーマンショックで、図書館はさらに厳寒の時を迎える。すでに資料・人件費の減少は続いていたが、多くの図書館がこの経済危機に追い打ちをかけられ雇用凍結する。経済合理性を最大限追求する世界的な新自由主義の台頭<sup>5)</sup>、膨大な利益を生む STEM (Science, Technology, Engineering, Medicine) 系研究には助成金も増し拡大するが、金銭的価値が直ぐに見えない人文学系は縮小されていく。

その一方で、人文学分野においてもデジタル資料は増加していき、新手法として IT 利用するデジタル人文学研究が生き残り作戦としても注目されるようになる。学術基盤支援を使命とする図書館はすぐにこの新たなデジタル学術を支援するために、データ資料と研究データ保存・公開基盤を整備し、新サービスとして IT スキルを教えるデジタル学術ライブラリアン、テクニカルスペシャリストを続々と雇用していく。

ところで、日本研究分野で起こった人文学の弱体化は、2012 年頃から人文学博士号保持者の教授職での就職難として現れた。そのため司書職に就く研究者が近年増えている。従来、図書館情報学修士号を司書雇用の必須資格としていた人事規定にも変化があり不必要とする所も増えている。一旦、高学歴の人たちが雇用されるようになると雇用条件が高まり、日本研究司書職には「必須ではないが望ましい学歴」として博士号が常態になってきた。現在、北米の大学図書館数校では、仏教学、近世文学、近現代史、民俗学の博士号を持つ日本研究司書が勤めており、さらに増加するだろう<sup>6)</sup>。しかし、これは新しい現象ではない。サブジェクトライブラリアンと言われる研究司書はその学問分野の修士号が最低必要とされ、従来から博士号保持者は多い。

ところで、博士号があるから司書として最高の仕事ができるわけではない。それは雇用されるための「運転免許証」で、最も大切なことは、どんな職業でもまず自分の人生の「使命」を持つことだろう。そして大学の教育使命とその図書館の使命を実現するために「司書として自分はどんな仕事をするのか」という目標が大切だろう。基本的にサービス業なので研究者でありたい人には向いていない。利用者が何を必要としているのか理解し適切な資料を紹介する。そして、利用者が「自立した利用者」になれるように資料を探す手法を教えることが大切である。また、多種多様な情報が容易に入手できる環境で、なぜ図書館（司書）の提供する資料が信頼できるのか説明できることも大切だろう。そのためには資料の勉強と情報、IT 技術をめぐる世界的な学術変化と社会環境の勉強は、日々、欠かせない。

### 3. AI時代のライブラリアン

#### 3.1 変化し続ける仕事環境

AI時代の図書館にはデータ集積が必須である。図書館でAIが運用できるビッグデータとしては貸出情報があり、ミシガン大学ではその活用について過去に検討が重ねられたが、資料利用情報は「個人の思想の自由」に係わることで、データ匿名化を施しても非常に注意深い扱いが必要であり、慎重案件扱いで保留となった。ただ、書誌データを利用して自動化された図書館業務はすでに二十年近く利用されている。英語書籍の場合、書籍に米国議会図書館件名標目の付いた書誌データが発注データベースに含まれているので、件名指定によって発注作業は見計らい方式で自動化されている。電子書籍はPatron Driven Acquisition（利用者主導選定）による自動購入が導入されている<sup>9)</sup>。

リファレンスの代替も、英語資料はデータ化されやすいので、今後、簡単なことは、グーグル検索がさらに深層学習の機能を高めていくことだろう。データ資料が増加することを考えると、今後は、さらに学問分野とデジタル技術をかね揃えたデータライブラリアンの雇用が増すだろう。既にデジタル人文学系の博士号保持者も司書として雇用されるようになってきている。つまり、代替可能な仕事をすだけの司書は不要な時代に入っている。米国で働く人は、いつでも「自分が必要とされ続けるためには何をすればいいのか」考えている。特に、最近は図書館にもスマートゴールという企業人事管理で使われている目標設定と業績評価が導入されるようになって、日常業務以上に自分に新しい付加価値を創り出す努力が望まれ、仕事量は増加し、司書の危機意識とストレスは高まっている。

#### 3.2 リサーチデータライフサイクル

デジタル学術、データ管理支援の図書館サービスの充実は今後益々推進される<sup>8)</sup>。まず必要なのは、図書館全体としてのリサーチデータライフサイクルプラン設置である。そのプランは全員によって共有される図書館サービスの大切な「地図」になる。各自がそのサイクルのどの位置にいてどんな仕事をするのか確認し全員が共通理解をもつことになる。例えば、ある学生が日本研究の資料を探してリファレンスデスクに来るとする。デスクにいる司書はその学生を日本研究司書に送る。その司書は学生が必要とする資料を入手する。サイクルでは資料収集段階だ。もし学生がデータの分析方法を必要とすれば、デジタルライブラリアンの担当となる。分析結果の可視化はヴィジュアルゼイションライブラリアンの担当となる。全員がリサーチサイクルを共有することで、誰が質問されても利用者がリサーチのどの段階にいるのか判断し適切なサービスを提供する。司書やテクニカルスペシャリストは学生・研究者がスキルを習熟できるように教え補佐するだけで、作業自体は請け負わない。また、研究者に対しては研究助成金申請や協同研究に不可欠な著作権処理、データ管理計画、安全な保存公開を可能にするIT基盤、出版等の作業を、図書館

専属の弁護士とデータ専門官、出版プレスが補佐する<sup>9)</sup>。また、司書は、データベース試作品テストにも参加し、研究利用に役立つ企業の商品開発にも協力する。このように図書館は教育研究活動の「総合センター」として大学の不可欠な組織となるように努力している。これら全体の作業を位置づけるのがリサーチデータライフサイクルプランである<sup>10)</sup>。

ところで、日本のデータ時代の司書の「古くて新しい仕事」としてはAIが扱えないアナログ資料、つまり一次資料を扱うアーキビストがもっと重要になるだろう。日本は歴史が古く、まだまだ宝物の史料が眠っている。くずし史料を読解して資料の検証と整理ができ研究手法を教えらるアーキビストは、しばらくはAIには代替できないだろう。また、公文書の収集整理、保存・公開という公文書管理は国家とともに存続する。周知のように公文書は民主主義国家では国民の財産で、その記録と管理は最重要分野である。これらの資料の修復保存の専門家は未来永劫に必要とされ、デジタルアーカイブも今後増えていく。

また、アクセスの改善と充実が一層望まれる。日本には地域資料や特定分野の専門資料館が多い。しかし、例えば、文学館、専門資料館にある資料群が目録データベース化されていても、そのデータベースが全国的な統合されたデータベースに組み込まれておらず「未発見状態」になる貴重資料も多い。これらの日本にある多様な知的資料を総合的に網羅して統合検索を可能にする国会図書館ジャパン・サーチに海外の利用者は大いに期待している。

#### 3.3 コレクションとしてのデータを創り出す

司書はあるテーマに沿った資料を揃えるというcurationの仕事を行い、curatorとも呼ばれてきた。今後はウェブアーカイブなどのデータ資料収集<sup>11)</sup>、digital curationによって新たなデータ資料を創出する仕事の比重が増すことだろう。図書館に散在する資料、アーカイブ文書群の中に点在する資料をそれぞれデジタル化し、散在しているままでは「未発見状態」の資料をOMEKA等のヴァーチャルなプラットフォーム上で「ひとつの意味のあるコレクション」としてまとめて、学習や研究のために利活用できる形にする、コレクションとしてのデータData as collectionを創り出して新たな利用価値を付与する。このようなdigital curationの資料創出の仕事も増えるだろう<sup>12)</sup>。

さらに、図書館の資料をあるテーマに沿って構成した展示を一般公開して、講演会を開くなどのプロジェクト企画も大切である<sup>13)</sup>。ともすると、一般市民には「学者は好きなことをしているだけ」と思われがちな人文学研究がなぜ大切なのか、その人文学を支える図書館と司書はなぜ大切なのか、そのために税金を使うことは妥当なことであるということを、納税者である市民には説明する責任があり、理解を得て支援してもらう努力は人文学にとっても人文学系図書館の持続的発展のためにも不可欠なことだろう。

#### 4. Japan in the World, the world in Japan

北米全体の日本研究基盤支援組織として、司書と研究者から構成される北米日本資料調整委員会がある<sup>14)</sup>。これは会員制の団体ではなく、数名の司書と研究者によって運営される非営利団体で、北米全体から意見を汲み上げ、北米での日本資料のアクセス改善のために組織レベルでの解決が必要な事項を取り上げ、日本の関係機関に伝え協力を要請したり、必要であれば日本の研究機関にも協力している。また、日本研究司書の能力向上のために各種研修も実施している。筆者は2010年から2012年まで会長を務め、図書館総合展で日本資料アクセス促進国際サミットを催した<sup>15)</sup>。

会長在任中の2011年に東日本大震災が起り、日本資料の海外での保存の重要性を再認識して「日本コレクション協同構築ワーキンググループ」を他の司書達と共に立ち上げた<sup>16)</sup>。一図書館がすべての書籍を収集することは不可能であり、毎年のように予算削減されているなか、各図書館の特色のあるコレクション構築の調査をして重複購入を避け、人事異動があっても情報が伝達でき、継続的に全体でコレクション構築することを目指している。しかし、各図書館には独立した予算と方針があるので、コリアン財団が韓国研究のある図書館に予算分配をして、各校が収集するテーマを決め、全米で総合的なコレクション構築をしている韓国資料コンソーシアム<sup>17)</sup>のような強制力はない。

日本コレクションのワーキンググループは多様な組織、多様な司書の集まりであることを心がけている。構成員の所属する大学の規模や所在地、司書の経験年数も考えて時にはメンバーチェンジも行い、新人とシニアの司書を組み合わせ、異なる視点や特性を取り入れた集まりで議論する。皆フルタイムの司書なのでできることは限られているが、全体（図書館利用者）に利するプロジェクトを立案している。全米各地に散在する多忙な司書がヴァーチャルな空間で協同作業するためには、お互いの意見の本質を理解し尊重する能力がいる。議事録を残して同意事項を確認しながら進む。そして、一旦グループで同意したことは守り、お互いの領域に敬意を払いながら協力するという、当然ながらプロとしての礼儀が必要である。個人の「プロの流儀」は多く語られるが、「プロの礼儀」あってこそどんな事業も継続的に成長させることができるだろう。

自分の目の前にいる学生が必要としている電子資料を手に入れるためには、日本における電子資料状況の改善なくしては不可能である。そのためには自分の仕事を越えて北米全体で協力し、諸外国の司書とも日本の図書館関係者、出版社やステイクホルダーとも国際的な信頼協力関係を築いて仕事をすることが必要である。北米には十数名の日本研究司書がいるが、北米全体を考え、また、グローバルに存在する日本コレクションというヴィジョンを持って仕事をする司書がこれからも育つことを願っている。

ところで、海外に存在する日本語書籍の存在は、日本と海外との人々の交流や国際関係の歴史と無関係ではない。

書物の交流史からも情報収集がどのように国家安全保障と関連した業務であったかもわかる<sup>18)</sup>。また、日本資料専門家欧州協会<sup>19)</sup>などの国際会議に参加されることも薦めたい<sup>20)</sup>。図書館と司書・出版流通の歴史と社会的貢献を多角的に知ることは自分の仕事の目標や立ち位置を考えるために参考になることだろう。これまでの海外の日本研究と資料の発展は日本の図書館関係者、出版社、文化諸機関の助力なしにはあり得なかったし、これからも有り得ない。日本の皆様には深謝し、今後もご協力を心から仰ぎたく思う。

日本の日常において国外のことは見えにくいかもしれないが、日本のインフォプロの方達にも世界的ヴィジョンを持って日本にある豊かな資料を日本だけのものではなく、「人類文化財のひとつ」として捉えていただきたい。世界と繋がる仕事例としては日本の大学図書館も参加している国際敦煌プロジェクトがある<sup>21)</sup>。敦煌で発見された文書類は断片として世界各地に散在しているが、デジタル化されヴァーチャルなプラットフォーム上でひとつにまとめられたことで、敦煌コレクションとして世界のどこからでも統合検索利用できるようになった。今後、このようなデジタルキュレーションプロジェクトは人文系図書館がリーダーシップを取って推進されていくことだろう。

国際的という「日本の外の仕事」のように感じるかもしれないが、国際的であるということは、実は「自分の持ち場で多様性に対応しながら地道な仕事をして協力する」ということである。敦煌プロジェクトも国内資料あってこそ可能になった。また、日本の大学で増加する留学生が日本語学習に終わることなく日本語資料を用いて研究ができるように助ける、さらに人種、国籍、性別、身体的状態に係わらず、誰でもが平等に教育を受け研究できるように保証する、多様性に対応した図書館利用サービスを工夫し提供することが「国際的な仕事の本質」なのである。

明治維新以来150年間、「日本の国際化」は「日本に欧米文化を取り入れる」こととして実践されてきた。しかし、この発想は人類文化の多様性から考えると当時の帝国主義下にあった欧米白人文化中心主義でもある。21世紀の「日本の国際化」とは、国際的デジタル基盤整備に日本語が入ることによって、欧米言語中心の国際基準が多言語・多文化に対応して「さらに国際的な基準」になるように<sup>22)</sup>、「日本という一つの文化のもたらす世界の国際化」である。日本文化が世界に発信され、知られる機会が増えることは、例えば、米国人学生にとっては貴重な異文化理解となり、自己の文化理解も深まり、世界の多様性と共生の重要性を認識し行動することに繋がっている。東日本大震災が起こった時、日本に何らかの興味を持っていた多くの市民が中心になってStand for Japanと行動を起こしたことを忘れないでいたい。現在の「自国主義」が強まった国際状況を考えて、日本文化発信と「日本のもたらす世界の国際化」は、世界にとっていかに大切なことかわかるだろう。

#### 5. おわりに

1983年に発見された「ヒトラーの日記」が実は、フェイ

クであったことがアーキビストの深い知識により証明されたという事件があった。ディープフェイクが「事実」として記録され、個人の事実や歴史が書き換えられる可能性もある。歴史家、アーキビストはフェイクと判明した文書や Born digital 資料も、その資料自体と「フェイクであること」の事実が書誌情報として記録され保存されることが重要であると指摘する<sup>23)</sup>。人類は言葉を持ってから、絵画、音楽、文学など「共通の物語」を創り共有し発展してきた。実物と識別が困難なヴァーチャルな情報が容易に作り出され、自由な解釈が流布にされると、私たち人間を地理的空間を越え、過去—現在—未来と時間を越えて繋いできた言葉が不確かになると不信と不安感が増し、人間社会は脆弱化する。アーキビストと司書は長い歴史の中で情報の「真偽」の識別をしてきたが、識別した情報を記録して提供する、識別できる利用者を育てるといった情報専門家の仕事はさらに重要性が増している。それは社会の背骨を弱め歪めてしまわないための極めて重要な任務だろう。

歴史はかけがえのない一人一人の人生の集積である。しかし、それは記録され保存されなければ、後世に歴史として伝わらない。図書館は、まさに「人間が人間であるための基盤」を提供してきたと言ってもいいだろう。言葉は人類文明の基礎である。今、言葉の力が弱まっている時代に「インフォプロ」として成長することはトレンドな職業である以上に、私たち、一人一人の人生が大切にされ、安全に平和に共に生き続けていくために「社会にとってなくてはならない存在」になることではないだろうか。

#### 註・参考文献

- 1) 内閣府「国立開発研究法人におけるデータポリシー策定のためのガイドライン」  
<http://www8.cao.go.jp/cstp/stsonota/datapolicy/datapolicy.html> (accessed 11-08-2018)
- 2) <https://www.coretrustseal.org/> (accessed 11-08-2018)
- 3) 永崎研宣. デジタル文化資料の国際化に向けて: IIF と TEI. 情報の科学と技術. 2017, vol.67, no.2, p.61-66.
- 4) 横田カーター啓子. 世界基準の図書館情報サービス—アメリカの大学図書館からの視点. 情報管理. Part I. 2008, vol.51, no.3, p.222-225. Part II. 2008, vol.51, no.7, p.528-531. Part III. 2009 vol.51, no.11, p.844-847.  
<http://hdl.handle.net/2027.42/108142> (accessed 11-08-2018)
- 5) 例えば, ロバート・ライシュ. (雨宮寛、今井章子訳). 暴走する資本主義. 東洋経済新報社, 2008.
- 6) Kao, Regan Murphy. From Ph.D to Librarian. Dissertation Reviews. October 7, 2015. 研究と学識に裏打ちされた本格派 Subject librarian の仕事がよくわかる.  
<http://dissertationreviews.org/archives/12646> (accessed 11-23-2018)
- 7) 林豊. 大学図書館に広がる電子書籍の Patron-Driven Acquisitions. カレントアウェアネス 2012-07-12, no.218, E-1310.
- 8) 横田カーター啓子. 知の創造基盤としての図書館ミシガン大学大学院図書館. 図書館雑誌. 2016, vol.110, no.7, p.436.  
<http://hdl.handle.net/2027.42/122863> (accessed 11-08-2018)
- 9) Yokota-Carter, Keiko. Research Data Life Cycle working with students and faculty in Japanese Studies.  
<http://hdl.handle.net/2027.42/146183> (accessed 11-08-2018)
- 10) 横田カーター啓子. 総合学術センターとしての大学図書館—図書館における「出版」. 2016.  
<http://hdl.handle.net/2027.42/145740> (accessed 2018-12-08)
- 11) 国立情報研究所は日本の図書館事情に沿ったリサーチデータライフサイクルプランを紹介している.  
<https://rcos.nii.ac.jp/diary/2018/07/20180726-1/> (accessed 11-08-2018)
- 12) リーガン・マーフィ・カオ. スタンフォード大学東アジア図書館の日本に関する試験的ウェブアーカイブ・プロジェクトの2年間の歩み. カレントアウェアネス 2018-06-20, no.336, CA-1930. 註 6) も参照されたい.
- 13) Yokota-Carter, Keiko. The Digital curation project - Popularization of democracy in post-war Japan - virtual reunification of dispersed materials hidden in the Hussey Papers archival collection. Proceedings of the 8th Conference Japanese Association for Digital Humanities JADH2018 "Leveraging Open Data". 2018. pp.82-83.  
<http://hdl.handle.net/2027.42/145731> (accessed 2018-11-08)
- 14) 2018年10月5日ハワイ大学で開催されたシンポジウムと展示 "Post-WWII Occupation of Japan: The censors and U.S. Censorship Policies". 展示された Kaizawa コレクションはデータベース化されて公開されている.  
<https://evols.library.manoa.hawaii.edu/handle/10524/57059> (accessed 2018-11-08)
- 15) North American Coordinating Council on Japanese Library Resources (NCC) <https://guides.nccjapan.org/homepage>
- 16) 第14回図書館総合展タールジャパンからリアルジャパンへ—グローバルな日本研究を支える MLA コラボレーションを目指して. 2012年11月20日  
<http://hdl.handle.net/2027.42/145738> (accessed 2018-11-08)
- 17) NCC Cooperative Collection Development Working Group <https://guides.nccjapan.org/collectiondevelopment> (accessed 2018-11-08)
- 18) Korean Collections Consortium of North America <https://www.lib.umich.edu/korean-collections-consortium-north-america> (accessed 2018-11-08)
- 19) 和田敦彦. 書物の日米関係—リテラシー史に向けて. 新曜社. 2007. 小山勝. 戦争と図書館—英国近代日本語コレクションの歴史. 勉誠出版. 2018.
- 20) European Association of Japanese Resource Specialists <https://www.eajrs.net/> (accessed 12-08-2018)
- 21) 江上敏哲. 本棚の中のニッポン—海外の日本図書館と日本研究. 笠間書院, 2012.
- 22) International Dunhuang Project: the Silk Road online. 大英図書館を中心とする9カ国13機関協同プロジェクト.  
<http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/> (accessed 2018-11-08)
- 23) 永崎研宣. 前掲 3).
- 24) Ehrenkrantz, M. How archivists could stop deepfakes from rewriting history. GIZMODO.  
<https://gizmodo.com/how-archivists-could-stop-deepfakes-from-rewriting-hist-1829666009> (accessed 2018-11-08)

**Special feature:** Career Paths in Information Professionals. Career Path for Humanities Librarian – Work in the age of crisis of Humanities. Keiko YOKOTA-CARTER (University of Michigan Harlan Hatcher Graduate Library, Japanese Studies Librarian (rank: Librarian))

**Abstract:** With the development of digital technology, it has become easy for everyone to transmit information in public. Fact, fake, and deep fake are mixed. When even the fact misperception is also regarded as “an alternative form of fact” and falsification of the official documents is made publicly, it is difficult to distinguish from the real things. The importance and the social responsibility of the information professionals such as recording and preserving, and providing information, is increasing more than ever before, in a society where people tend to gather information favorable only for their interests.

**Keywords:** humanities / digital humanities / digital curation / data as collection / research data life cycle / data librarian